遊・女・回・廊

†アラクネ†

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

遊・女・回・廊

【Ｎコード】

Ｎ６６４８Ｈ

【作者名】

†アラクネ†

【あらすじ】

梅雨が過ぎ、太陽照り付ける夏が来る。この時期になると必ずあの橋に現れる、例の彼女も……。夏のホラー２００９二夜目★参加作品です！

『あんたぁ、また来はりましたんねぇ』

炎天下の真昼。いきなりそう背後から声をかけられたが、僕はただ近所の橋を渡っただけ。

また来た、などと言われても困る。ここを渡らなければ街には行けない。

「別に通過するだけですよ」

そう言って背後を一瞥すると、声の主はさもおかしそうにケタケタと笑った。

『本当、好きなんやから』

頭の上で大きく結った髪に、シャランと揺れる飾り櫛。

錦糸で刺繍された大輪の菊は、真っ赤な生地から零れそうなほど肉感的だ。

この平凡な住宅街に、艶やかな着物があまりに異様で毒々しくて。

「毎年毎年、いい加減にして下さいよ」

毎年毎年、梅雨が明けると現れる橋の幽霊。

毎年毎年言う台詞を、僕はまた今年も口にする。

『そう言われはれましてもなぁ』

橋にもたれて含み笑うこの女は、生前は遊女だったらしい。毎日客が来るのを待ち、選ばれれば相手の男に一晩を捧げる、早い話が売春婦。

『わっちかて、早く成仏したいんよ』

「したらいいじゃないですか、勝手に。迷惑です」

『せやかて、まだ足りんのよ』

真っ白な橋の欄干が陽の光を返し、ふわりと舞った遊女の白肌をより艶やかに照り上げる。

着物をはだけた遊女の右足は、膝の辺りから下が綺麗に無くなっていた。

『なあ？　こんな様じゃ、恥ずかしくて閻魔様に見せられませんわ』

ブラブラと血を滲ませた足を揺らして見せ、それに、と続けようとする遊女を無理矢理遮る。

「僕が責任取るべきなんだから、でしょう？」

この迷惑な幽霊いわく、こうなったのは全て僕のせいなのらしい。

僕とは言っても、今現在の僕ではない。生まれる前の僕。記憶には残っていない、見知らぬ僕の、前世での血生臭い話。

『あんさん、わっちが武家様に身請けされるん、どうしても嫌がりましてなあ』

この橋を挟んで、僕の自宅側にずらりと遊郭が並んでいた頃の事。

遊女として働いていた彼女と、刀師だった（らしい）僕とのありがちな悲恋物語。

『しがない刀職人のあんさんが、よぅ頑張って通ってくれはりましてなあ』

金のやり取りでしか触れ合えない間柄。

月に見下ろされながら、人目を忍んでそっとくぐる遊郭の門。外界には無い独特な香の匂いが、そっと鼻を撫でては客を誘う。

人には言えない、秘密の逢瀬であっただろう。

それでもそこには、確かな愛があったのだと遊女は言う。

でも。

『どうあがいてもわっちは売り物。大金はたいて買いたい言うもんがおりましたら、買われるしかありません』

で、結果的に、彼女の輿入れ（要するに結婚？）に絶望した僕がかなり派手に暴走。自分で磨いだピッカピカの刀を奮い。

『ひどかったわあ、もぉう滅多斬りもいいとこ』

橋にバラ撒かれた、美しかった元彼女だったモノ。

激情の一斬一斬に呪いがかかり。

彼女の血に濡れた刃が僕自らの心臓を貫いた時、固い呪縛が完成した。

『お蔭でわっちは、何百年も橋の上。生まれ変わったあんさん見付けた時は、ほんに嬉しかったわぁ』

「嫉妬の揚句に無理心中とか、前世の僕って最低ですね。でも今の僕とは関係ないと思いますけど」

『毎年同じことを言いはりますなぁ』

くすくすくすくす。

煙みたいに遊女が消えたので、僕はゆっくりと橋を歩き出した。

いつもの見慣れた道。

橋を渡ってすぐに郵便局があり、そこを曲がると広い大通りに出る。

道に沿って植えられた常緑樹の鮮やかな緑は、学生時代から見慣

れた色。

見慣れたいつもの景色の中を歩いているのに、僕を取り巻く空気が奇妙な違和感を帯びてくる。

「あら、こんにちは」

よく昼飯を買う弁当屋の前を行く時、顔見知りのおばさんが声をかけてきた。

挨拶を返そうとした僕は、いきなり顔前に差し出された物に声を失う。

「お弁当買って行きなさいなあ」

白いケースに炊き立てのご飯がたっぷりと盛られ、その上に唐揚げが乗っていた。

人の足の唐揚げだ。

華奢な感じの足首から先が飴色にこんがり揚げられ、ご飯の上に乗っている。

「……。キモ」

ああやっぱり違和感的中。

ここはやはり、遊女の回廊の中なのだ。

「……ねちっこい真似する女」

僕の舌打ちが聞こえたかのように、遊女のクスクス笑いが微かにそよいだ。

僕は走って弁当屋から離れ、いつもの見慣れた、けれど不自然に人気の少ない街の中を進みに進む。

バス停沿いの歩道は昨日の雨でしっとりと濡れ、乱雑に並べられた自転車はあるものの、いつもたむろしている持ち主達は見当たらない。

スクランブル交差点で歩行の合図に合わせて歩き出すも、そこを渡るのは自分だけなので全く無意味。

僕は交差点の真ん中で立ち止まり、目を細めて空を仰いだ。

直視出来ない真っ白な太陽。オフィスビルの窓が鏡のようにギラギラと光り、雲を散らした空が異常なまでに碧い。

『二人が愛し合ってた頃の空やんねぇ』

遊女がうっとりした調子で囁くと、空気の匂いまでが現代のものではなくなった。

くすくすくす。

どうしてなんだろう、と僕は思う。

数年前からふと始まった、年に一度のこの奇妙なイベント。

何百年分もの怨みが積み重なっているとはいえ、たかだか幽霊一人にここまでの力があるものなのか？

『それは愛の力ゆえ』

くすくすくす。

「……ああ、そうか」

怨みではなく愛の力だからか。変に納得して、僕は再び歩き出す。

携帯ショップの陳列ケースの中には、カラフルに塗られたミニサイズの人の足。

出来たばかりのお洒落な美容院では、美容師が血塗れになって人の足をカットしている。

ペットショップの可愛い犬達が噛んでいるのも人の足。

足、足、脚、足、脚。

ワアンと耳鳴りに襲われて、少しだけ視界が歪む。

「おや、貧血ですかな。いい薬がありますよ」

薬局の店主が出て来て僕を気遣うが、やっぱり勧めてくるのは人の足。

吐きそうになりながら何とか走り、ようやく目当てのＣＤショップが見えた時には泣きそうになっていた。

「いらっしゃいませー」

いつもの平淡な店員の声が、今日ばかりは素晴らしく耳に爽快。

いらっしゃいましたよと声に出さずに返答して、よろめきながらも自動ドアを小走りに。

小走りに抜ける……

『ゴールなんぞありゃしませんえ』

くすくすくす。くすくすくすくす。

元いた橋の上、欄干に腰掛けて笑う遊女。

「……」

落胆してガックリと座り込む僕を見下ろし、遊女はゆったりとキセルなんて吹かしてみている。

最低だ。本当に本当に最低だ。何でよりによって今日なんだ。

「D・Dの記念アルバム、各店20枚限定……、今日買い逃したら後が無いのにっ！」

『なら、早ようお勤めなんし』

遊女がゆらりと空気に溶けて、引きずられるように辺りの様子も一変する。

畜生、やっぱり今年もやるしかないのか。

ゆるゆると形を変えていく橋を溜め息とともに眺めながら、諦めた僕の手には硬い感触。

ああ、月が綺麗だ。昼間なのにな。

今や見えるのは、何百年も前の美しき飾り橋。唐草や狛の彫られた欄干は、艶やかな朱色で鳥居のよう。

木製の足場がギィと音を立てると、薄闇の向こうに見える人影がピクリと動いた。

今年は、あれか。

僕は手の中の刀をギュッと握り直し、迷わず相手に向かって走り出した。

慌てたように踵を返し、小さく叫んで逃げ出す人影。

月明かりに浮かび上がった人物はごく普通のＯＬで、これは過去の回想でも幻でもない。

必死で逃げるＯＬは、現代から迷い込んだ普通の人。

僕と幽霊と過去の僕、時空を歪めて作られたステージに招かれた、哀れな罪無き生贄なのだ。

でも、仕方ない。

イヤ、と引き攣った声が上がると同時に、僕の手がグレーのスーツを掴む。

掴まれた衿を振り解こうと暴れ、ＯＬの恐怖に見開かれた目が僕を、僕の構える刀を捕らえた。

次の瞬間、ドスリと伝わる重い感触。

パッと噴き上がるシャワー。

生暖かい真っ赤なシャワーだ。

再び容赦なく振り上げられた刀の切っ先が、キラリと鋭い光で闇を斬り。

断末魔は聞こえなかった。

ひどくあっさりとＯＬは崩れ、何度か弱々しく痙攣した後動かなくなった。

「……はぁ」

血塗れの刀を地面に突き立て、僕は動かないＯＬの横に膝をつく。

ＯＬが絶命しているのを入念に確認すると、僕はその足からスカートとストッキングを取り払った。

地味な女だったが、足は適度に筋肉が付いて形が良く、手入れも充分でとても美しかった。遊女が気に入ったのも頷ける。

僕はＯＬの服で刀の血を拭い、刃を垂直に足の付け根に当てた。

「ゴメンね」

力を入れてグッと押し込むと、骨までは軽く進める。ここから先が力が必要なのだが、それを知っている自分が少しだけ気味悪い。

僕は折るか斬るかという力を込め、無理矢理に骨を切断した。

またシャワー。

「ほら、取ったよ」

刀を捨て、のろのろと花束でも贈るように血塗れの足を掲げ持つ。

ポタポタと滴り落ちる鮮血、淡い月光の下で、まるで散り落ちる花びらのようだ。

『あぁ』

遊女が嬉しそうに目を細める。抱きつくようにそれを受け取ると、満ち足りた笑顔を浮かべて僕に背中を向けた。

「ちょ、待ってよ。ついでだから、この子から他の足りないパーツも取ればいいじゃん」

新鮮な死体の活用法について真っ当な意見をしただけなのに、遊女はキッと僕を睨み付けた。

『不粋な。わっちが気に入ったんは、この女の足だけやわ』

言うなり、いつの間にか再生していた足で、ＯＬの死体を蹴り上げる。

おいおい、それ、たった今当のＯＬから強奪した足ではないのか。

落下した死体は、派手な音と飛沫を上げて川に消えた。

これで何体目になったのだろう、パーツを取られて川に沈んだ女性は、不思議に一人も浮いてきていない。

『ほな、また来年なあ』

着物の赤と淡黄の重なりを柔らかく揺らしながら、遊女は再びにっこりと微笑んで、橋の向こうに消えていった。こうなるとあっさりしたものだ。

気付けば、いつも通りの近所の橋。

相変わらず眩しい太陽が照り付けてはいるが、それはさっき街で見た濃い碧より、少しだけ掠れているように見える。

何事も無かったように鳴き続ける蝉の合唱の中、僕はチッと舌打ちした。

「また来年て、まだ続くのか……」

夏の暑さが麻痺させる奇妙な恒例行事。

しかしながら遊女の成仏と同時に呪縛が解ければ、川底の死体が一気に浮かび上がるのは想像に難くない。

それを考えると、元の面倒嫌いな性格と夏の熱気が頭を鈍くし、まあいいかという気持ちにさせられてしまうのだった。

何はともあれ、今はＣＤショップに急がなくては。

遊女の髪に飾られた飾り櫛。それがかつて自分が贈った物だった事を、何となく思い出した。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6648h/

遊・女・回・廊

2010年10月8日13時13分発行